

## 地域と交流する

### 家庭的保育の事例学ぶ

全国家庭的保育連絡協議会（水嶋昌子理事長）は5月27日、「家庭的保育事業者としてのスキルアップ」をテーマに平成30年度セミナーを開き、地域との積極的に交流する家庭的保育の先進事例などが紹介された。

シンポジウムでは、横浜市中の静直子さん、堺市の松平さん、熊本県菊陽町の窪田絹代さん、横須賀市の山下恵子さんが地域交流の実践事例を紹介した。中静さんは、週1回、近所の公園に出向き子育てサークルに保育教材を提供し、育児相談にのるなど交流するほか、地元の中学生の職場体験を受け入れていること

などを報告。松平さんは、散歩の途中で知り合った地域の高齢者施設に年8回程度、訪問交流する事業がここ3年ほど続いていることを取り上げた。久保田さんは、低体重児1組を含む2組の多胎児を受け入れたことで、行政や保護者との密なコミュニケーションが進んだ旨を報告。山下さんは、公園で出会った子育てママの支援が町内会館を活用した育児サークル活動につながり、子育て仲間を見つけにくくなっている母親らに喜ばれていることを紹介した。

意見交換の中では、今年から家庭的保育事業を行っているという家庭的保育者から、憤怒痙攣で呼吸停止に陥った事例への対処方法に質問が寄せられた。医者からは問題ないと言われるが、保護者が重大視しない中で不安感が消えないとの報告に対して、ベテ

ラン保育者から「6か月までの赤ちゃんによくあることで、呼吸は止まっていなと思うので問題はない」、「痙攣で死ぬことはないが、呼吸停止の時間を測るなど記録はきちんと取っておくほうが良い」、「1分を超えるまでは観察しておく必要がある。てんかんの子どもを受け入れた時には、市や保護者も入れて対処方法について覚書を作成した。不安であれば覚書を作成したほうがよい」など対応案が出されていた。

基調講演では、「地域とつながる家庭的保育」と題して、大豆生田啓友・玉川大学教育学部教授が登壇。今回の保育所保育指針の改定については、乳幼児期の質の高い保育を目指すとしたもので、意欲や自尊心、ねばり強さなどの非認知的能力にも目配りされている旨を指摘、乳幼児期に大人に甘え

ながら大人と肯定的に関わることで信頼関係が生まれ、小さな成功体験の積み重ねから自信や意欲、自己肯定感につながっていくことなどを挙げ、乳幼児期の応答的なかかわりの重要性を強調した。

その上で、子育て広場からスタートした小規模保育事業が、「地域とつながりながら保育する」ことを理念にかけ、雨の日でも公園に出かけ、地域の高齢者施設に出入りするなど町を保育の場としている例を紹介。保育施設がうるさいといわれる今だけに、みんな子育てする時代になっているとして、町に出向き子育てに関係のない人も巻き込むことの重要性を説いた。また、地域資源を活用することによって保育活動が広がるなど可能性が開かれている点にも触れた。